俳諧西歌仙

863
119

国立国会図書館　タイトル『俳諧西歌仙』 請求記号 863-119

ガラス使用

俳諧西歌仙

863
119

国立国会図書館　タイトル『俳諧西歌仙』 請求記号 863-119

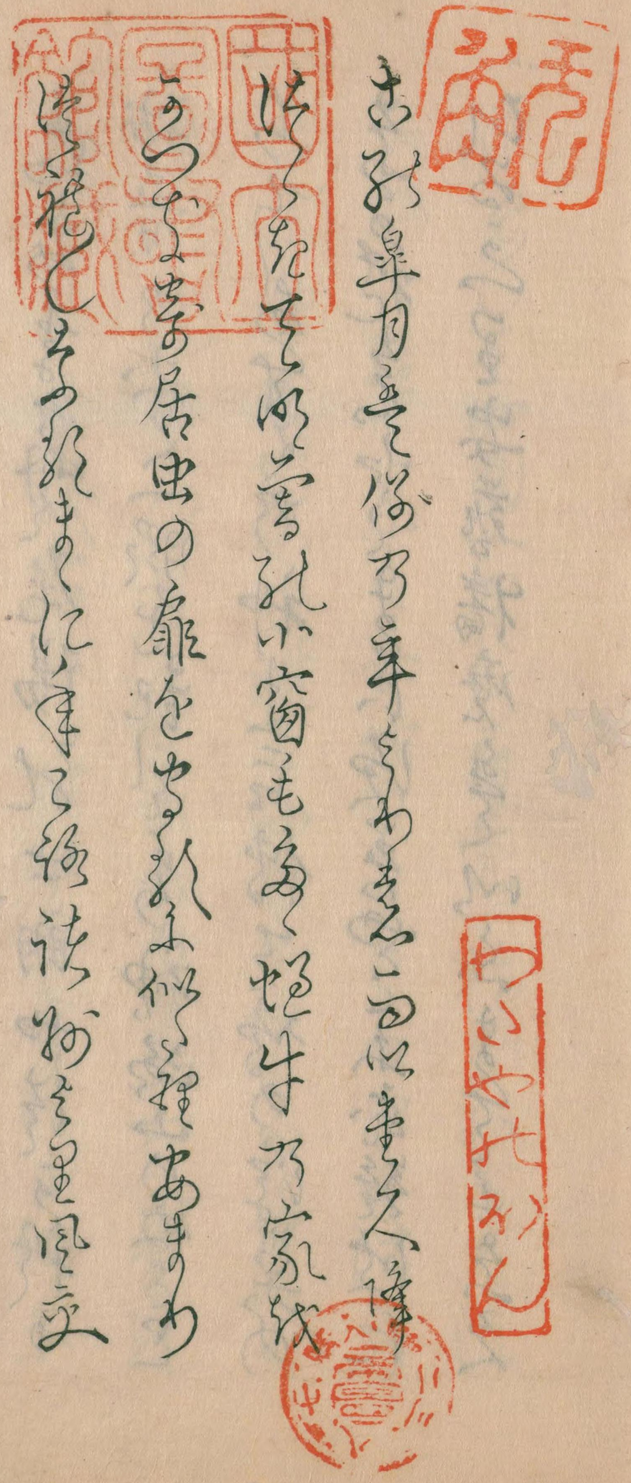
ガラス使用

東都 知足坊一瓢著

俳諧 西歌仙

校合 有鱗 兎一 徐柳

863-119



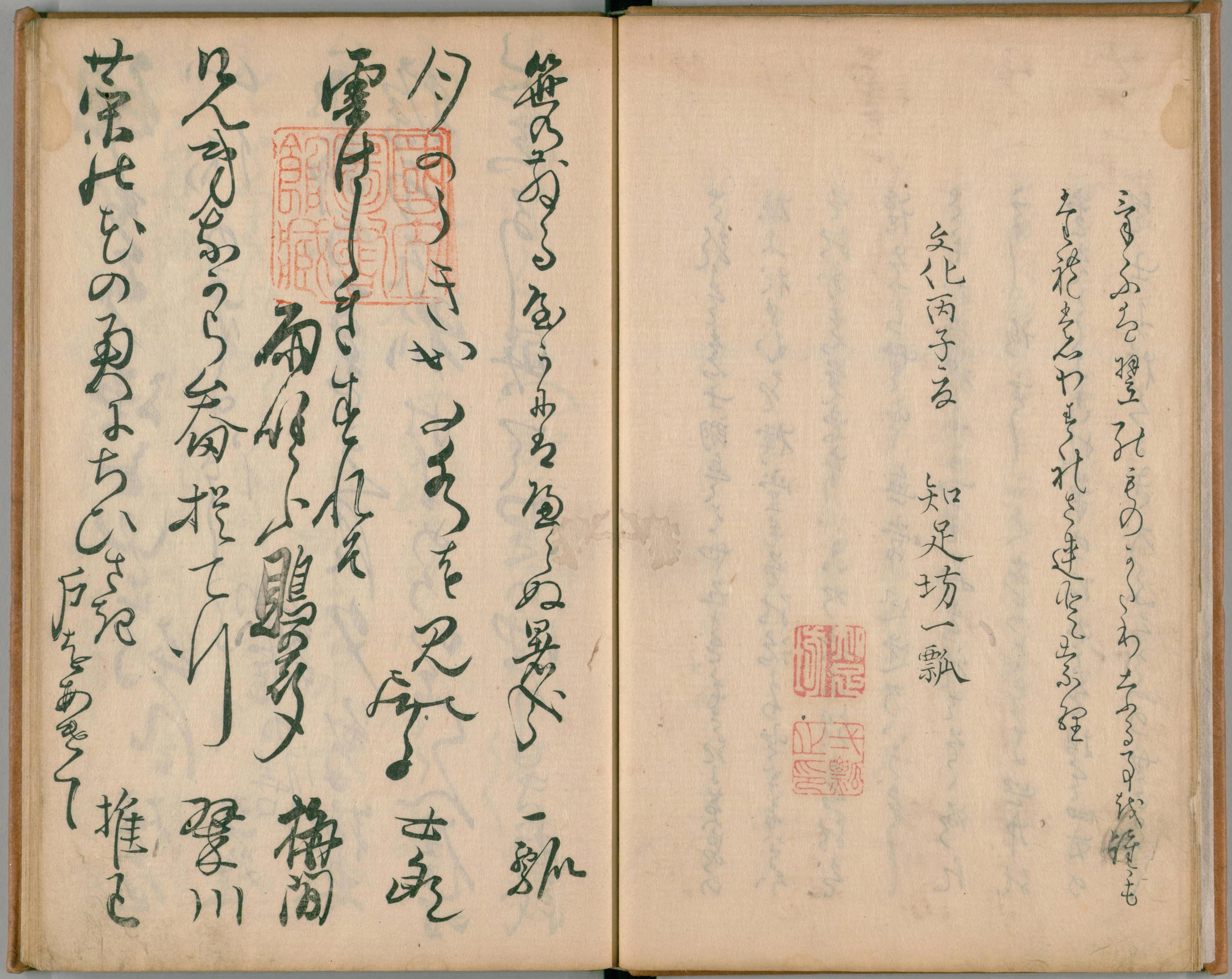
国立国会図書館　タイトル『俳諧西歌仙』　請求記号 863-119

ガラス使用

さ六里出きわ此わあけてこ稚を見れ
以まれ此に涼しくも深へ多く雅士たちの
草の詠りして五此きに六と勢も先乃ての
事やあ李々舟尾陽の士朗や清の稚か
弥暑乃木く一服を起してよわ神路山のぬさと
ちらしあすれ乃神に言傳て鳴の浮巣の
ちかの稚さん此てまゐ須美やこに我難波に
ひるこ八里安藝橋麿を以ふまてもなく

由起して四國一わくわ筑紫一於もむき天涯
海隅を經て果ゑ長崎のくまらよわ四とをはかわ
先に屋に多架さ稚も西歌仙聖意名清く
面をもや是の首尾三十六句を三十六人の筆の
あやかして是我此ならは此重乃れも此に
あ〻路を動かし是を是も狭室の子ちに海内の
友を遊れし丹そそまこの中に或ハ謹彼を恐とう
蒲團に足伐さし入稚五の推敲に情をとらく

国立国会図書館　タイトル『俳諧西歌仙』　請求記号 863-119
ガラス使用



国立国会図書館　タイトル『俳諧西歌仙』　請求記号 863-119　　ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『俳諧西歌仙』　請求記号 863-119　　ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『俳諧西歌仙』　請求記号 863-119

ガラス使用

一瓢　穐氏号知足坊亦雪耕庵亦攝中居住于江戸谷中本行寺

士朗　井上氏号朱樹亦琵琶園俗称專庵尾州名古屋人七十有余歳而没于時文化九壬申　九月十六日

梅間　梅間氏名登字子龍号張古俗称半十郎尾州名古屋人居于梅花園中

翠川　瀬古氏号花鳥亭俗称喜左衛門住勢州松坂

推己　浅原氏通称半十郎住于勢州松坂

椿堂　德田氏号東竹菴俗称長兵衛住于勢州山田

五雄　号萩亭俗称鈎屋文助尾州名古屋人

挑抹　勢州古市人

雀鳴　松田氏名幸慶号雨竹庵俗称與吉勢州山田祠官

省我　勢州山田御師

国立国会図書館　タイトル『俳諧西歌仙』　請求記号 863-119

ガラス使用

曉浦　勢列人

文常　姓源辻氏名用信字府留号芙亭俗称平右衛門江列堅田處士

甘谷　号丹頂抹亦菅蒻庵加列金澤人

雪雄　号梅室加列人来居于子安

魯隠　山形氏名長康号縄海子俗称用助住于浪花今橋通

長齋　姓七五三名公濟字廷美号抻壺俗称作左衛門住于浪花淀屋橋南涯

鷲雪　俗称茨木屋和助住于浪花心齋橋上人町北

宋彪　長吉氏号白崔園俗称宋屋彪太郎住于浪花堂嶋濱三丁目

桐梱　仁木氏号五彩堂通称竹輔浪花人居于摂列兵庫

脱員　播列人

玉屑　釋氏号栗本住于播列宍田神宮寺

化貝　播列人

百明　[redacted]

武陵　号杜陰通俗西尾吉四郎住于丹列篠山城西大山

帛道　備後人

樗堂　栗田氏号息隠亦二畳庵緣列松山人遊于藝列御手洗没于時文化十一甲戌八月二十一日

鹿門　俗称松嶋屋常十郎藝列御手洗入

戈坡　竹原氏藝列御手洗人

篤老　飯田氏号篤老園俗称完藏居于藝列廣嶋

羅風　俗称油屋仁右衛門住于長門赤間関

国立国会図書館　タイトル『俳諧西歌仙』　請求記号 863-119
ガラス使用

了國　齋藤氏俗称東四郎豊前小倉藩士

自由　大野氏名飄風筑前福岡藩士

凡坡　曽我氏称養庵住于筑前波加多

四軒　田口氏俗称儀兵衛住于筑前福岡

葵亭　姓佐藤俗称藤屋勝右衛門住于豊後日田隈町

幽嘯　越後長岡人來居于肥前長崎

よろづ病こちに老くちてなも
せしにしなくなりぬるを

露れ方をもてなつかふや五月雨　成美

うつみ火を鼻て見るひとわかれ　袁丁

茶はこけや年貢を有して花盛　壽翁

里の子や正月遊ばめこうれ　老鴉

鮫れ毒そしこせうたる月夜に　心非

ひろあても寒菜さひし古茶中　車両

うつ飛すれめてこくるし夕蕾し　夯貨

寄やすし枳殻もいつ月を花に咲　守静

法油まてを注て来る良や雀の子　道彦
花にさくかれ社と面のさそうしき　百之
三いねとなくこれ夜とはなりにかわ　一峩
人並に朔日をまちる茶和布の茶　周化
詩の茶のめさ方し学校花法堂　桃隣
白露や十日に一度掃もすれ　右民
ちり蝉の明日となりぬ学は木　巴濤
連立て後ろ孫ゑ鹿の子り礼　秋耳
山魚や五歩かとあらて浩れれば　對竹
ものに倦て霜夜を聚く眼鏡の茶　諫圃

はるれ雪散法き出して降らせて梨　文屋
五月雨や文をわかれす家のうち　久藏
橋のもゆてさもちるれ水も夜落月　芝山
ふへ花蝶をかともゆにちつゝやら　鈍齋
千月の日に横ふ也淑田の橋　宇橋
塩釜のはるまきや方吹ふかわ　長閑
みしの夜を鶏の鶯に掛ゑ　永矢
まき臭き雀の群よ蓼の茶　太筋
花さの梨地獄の使ひ多し　仙骨
古家のそしのもうまきそ梶の茶　鬼洞

国立国会図書館　タイトル『俳諧西歌仙』　請求記号 863-119
ガラス使用

何事も万てを秋をのさはまとられ芒　寥松
菜の花に咲ちくされなそこれ家　一阿
山を焼くうしろも雪れなかわれ　雨籟
まほろしや牡丹の花もたの万れ　孤山
かたをみの芦にちよいとや角田川　蕉雨
蛍虫見して煙もてなせ蚤の花　竹馬
雪くさもの焚明れ船渡れ　午心
夕の水やゆうわかりしき人春来る　明良
今世日や拍子もうえはいその浪　可麿
蛍にはこれかけるれ　無れ鈴　竹妓

桃さくや家なるを建る浦れ人　完来
きわしす鳴者とて植し小菊れ　詠帰
好登鶴て　おりひ世みそわ升落　護物
も寒さにるけて淋しや浦の世方　芳渕
まれ雲や笹に志くまして何地ゆく　胡準
蛍ゑゑ万てたのむ本落や夜の月　一蕙
うらはすれ見なれ鳴ちなまゐちにし　其堂
ちる花を法もしぬものを降こゆき　鷺雪
千月てゆきさきものや笹れ家　采年
梅の魚れ峯にとくれ雪ゆるし　宗瑞

国立国会図書館　タイトル『俳諧西歌仙』　請求記号 863-119
ガラス使用

知足坊閣中

清月夜に高のらまさう孔子ゟ　尓堂
春風や関れ手形の横ふと海　蛙足
そ氣の夜をうちさんでさへ面ふくし　少年　雀人
景清も坂くひけ里五條坂　兎一
鉢まき込四角な鉢も花の巾　和扇
姫牛なら大きいう我いな里　徐柳
扇にも曲てのおかわなつれ内　省己
朱袋おくや柳れ扇のうへ　徐風
雲枯をおのめうしれ菜汁に　春成

夜れ月とりてやさまてちさくなる　有鱗

一

蟹れ目の松のうにゝ山や五月雨　國村
黄昏や花れむうひに待乳山　斗月
聖の雲や嚔のあてもひつかむ　東雀
麦れ穂に膽はしてやうへれ房　輗甫
猫の忘るなにかまをかくしかわ　梅仁
夜に入し僧をこそくれ栄子ゟ　其杯
墨染の方を万くり手に数やりに　雅長
松風を秩にいまらんこゝろもうへ　青涼

国立国会図書館　タイトル『俳諧西歌仙』　請求記号 863-119
ガラス使用

口なのいて不二と名のむ氣を小船　可良久
堂に見る深くそしきやまゆしれ山　五渡
霰とそはんしりこねつ霄の空　亜好

山城

夕陽に引き底されなかなれ屋　蒼虬
むく起や稲荷やしきれ麦ひたり　茂良
日表をみれにみにして素の形　土卯
さし浪れ調子岩すれたるれ徒　其成
明てひさしく屋のわかまとか形　月居

大和

木とてきすなかをこのもの鳴死嫌ひ　空阿
宿のをとそれ来て踏む深雪のれ　拾葉

河内

もや人の家建に来るなうめか形　耒耜
陽光れ真にのほるやはるれ宮　宝雨
蛭ひとつ多徑にやうに動きかり　花史

和泉

傘さして出れた様に日れ目さす　喜齋
松の声やはたとたねとはしま炭　觜笛

国立国会図書館　タイトル『俳諧西歌仙』　請求記号 863-119
ガラス使用

とゝ乃らぬ夫小海老汲むみちとゝ　万和
春し咲や若とる僧も浮世にて　木老
十月の花の下　たの梨　炭一駄　井眉
山風の押へ法ある　よ鶯鶯ふるう　尺艾
なのちかのや雨も浮屋きはつ　鱈　三津人
鶯ふ見きてやらくて　炭あこの里　星譜
咲日のら学校をまて見ぬ　牡丹かれ　奇渕

伊賀

隠蓑の鐘　撞てゐるしかれ　猪来
春風やまゝ雪の　松の風　士得

伊勢

深しさや人の雪の　呆もちまき　丘高
大年や炭挽て居る　相撲とり　耕圃
寄付の松のはしらも　小春ふ　周終

尾張

夜通しに降名ありけり　年の雪　竹有
学の戸ふ見通す月　色ちまのり　女汝
山の月ゆまして東て　色の月　鹿野
植る間もはやのふれし　竹の蔭　東陽
祇園会や人の心　花まる　逸人

国立国会図書館　タイトル『俳諧西歌仙』　請求記号 863-119
ガラス使用

花見るを寿して庵の花盛　杜堂

死語る人の多さよ盆の月　岳輅

三河

月の出てこゆるや海の鳴る雨　卓池

山口や秋をさる亀の栗のいの　岱呂

ある寵の櫛ほか真すくすまし　棋老

魚足や一面の葉ま凉しかり　秋擧

遠江

何ちらきこをそしきまに捨て名の月　木甫

梅さぬし何なきる上葉庵丁　露岳

咲く花を志向にこくや鯛の鱗　三枝

雛店やまかり積て出る二日月　露喬

駿河

夕風や汐家の合歓のさわぎちらす　畫牛

鶯のあるに積もるわよ時き二日　石雅

甲斐

篭出て柳瀬の里の自ら永き　可都里

春雨や山の青の宿の海松海雲　看斐

梅柳桜も春の世の何事にある　漫々

尼寺の人しまちのさわ蓮の花　童行

国立国会図書館　タイトル『俳諧西歌仙』　請求記号 863-119　ガラス使用

抱たらまゝ毎に逢ふ夜や春の雨　百二
なされし草鞋賣とや柳番く　一作
屋るせちすき新を寝てさへ杭の月　眞恒
冬の夜の法もるや春き杭の月　草丸
氣の法よい蛙の生れかわかきゐる　才馬
掛てある大きな刀やうな法たる　草鳥
泥に角を抱くこころの巨燵かれ　嵐外

伊豆

涼ゝ臺月なるかゝを万くらゝ家　雪髭

相模

新をわやとわはやさまして更衣　葛三
浦の山ゆふ屋を杭のうしろつき　玉珂
心裏ゐるに夏さらゐんせうそ葉の花　澧水
みの虫と何そにふつまし花のたる　洞く
月をゐるたつみに夏るや老の波　うつほ
るさしと鉄いさゝひや春の雪　雉啄

安房

無の葉のさゝやきやうも四月ふ　杉長
ゆふ立も待ちの杭ありて無の杭ちる　其文
美しく爲るをしたふそこうをつたる　郁賀

国立国会図書館　タイトル『俳諧西歌仙』　請求記号 863-119
ガラス使用

上総

浮しさにさくしふむや堤のら　三化

聖れ宮の里除挟さきまかり　里丸

象潟や荳れふねまで漁の苗を　白老

下総

ふえ込て深つて見えを青田ゆ　金堤

苗代に玉のやうなる月夜の那　崔老

とわ志めぬ盆れをれしや宇治拾遺　雨塘

竹の月もや鮑賣の来るころ　尼　素月

鮫鯉を尾ひまでにもちぬもつ鰹　北尼

加藤川に清く　の事を里や心を　素廸

やゝ月ゆまで何と疎に　けるの鹿の影　青洒

年のくすくれうしろやきりくす　維平

たね上る相織れ玉もうめの花　蒼峨

何なとわて雨に逢ふ日ろ鶯れ声　青岱

軍こゆ皆戸のらくれ来るまして　李峰

花さのわ生まこのからは濡ゆを毒　此蘭

ものゝ忘るゝとよ鶯ゆ里に鳴る月　晩齋

抱ふも正月さきん鮑鯉して　茶彦

常陸

いちはつ御ふ迎てやうちより二日月　李尺

葛れ葉のうらちきものは猫の恋　柳麿

花の学廃頼く法るをまつくり　杜年

松ほともさらく時やもしれ花　祇鳴

夷うれし菓子捨てもなまふる　松江

近江

このうつにはやめ見もかく紀ハ葉薩　申齋

月新の志みこむ松れちしら乳　千影

花の下人をひさわも捨らまきに　宇洋

雲ふ苔をなく海へ捨るや足袋れ砂　班車

温泉のさ湯れ多にまりけ田にしに　鳥頂

あら鶯や鳴雪れ中をきにゐる　志宇

此やすき花やちらしと青すき　士明

名月の面にあれたる夏こう那　于當

美濃

燒はきし雲は翎の自ひこれ　千阿

見ぬのちきにしも安ふれ枯尾花　草人

飛彈

鳴蛙人れこゝろを何方くして　儲史

二度三度月の出ことて秋ふき　乙麿

信濃

寝て起て手拠ニ月しやそ秋の秋　素檗

休まする馬れ面まて葉のてる　武日

我主のまちれた掃きにけの雪　若人

涅槃像殊見ておれに息もなわ　一茶

上野

昔れこゑうきませる鶯の那　蘿月

人傳のうしれ山やはるれ月　柏翁

落栗やうたゝれ時のいさし多　阿兮

備耳てあし畑りや旅のと紫　碓令

昔子よはしまくらせんこゝろもうへ　鹿右

下野

むうひ火や山根をゝる雷れ春　魚とき

柚の花やひとつ咲てもものゝ数　北岱

いつのまに寂るまたちりしそ女郎花　雄尾

陸奥

この草にうちもやされて咲くや梅　平角

から鮭を本草にして冬こもり　冥々

夕ゑ紫赤きもものゝ見る色　素郷

梅柳世を木のくれて見ゆる之　雄渕

国立国会図書館　タイトル『俳諧西歌仙』　請求記号 863-119
ガラス使用

寒々れは一回れ手洗ふまのかわり　日人
こまさんも夷れ青こや豆腐串　雨考
凍しされ見えて歩のや磯の人　沾橘
痺き門の極濁りて主とのみ　與人
超えてうれ前垣を洗ふりの梨　秋夫
あ安まれ伸上るなり夷れ月　溪滋
住ふる寸月やそ青れ八重葎　布席
あこまて明るくしうり苔れ花　乙二

出羽

世を捨る人点似ものれ萩すき　野松

きぬ出て寄まむせる小庵ぶ　五瓢
弓掴枝にひつこまて見る桜うれ　豆英
六月を夜て投ようもすひ夜　巴陵

若狭

見るまなつてまむ暗て夜のかわ　春哉
みしの夜やさしをも月れ廿日ねと　蟻行

越前

夷えらぬ星とまいはしたこ屋等　白鱗
蛙まねれは人なし庵の小菜畠　振〻

加賀

うれ花の下掃はきまはかり　眉山
種ひてく鰍めてうきし命の乳　音人
をみなへし名にもたれ咲まそ楽　鹿古

能登

春れ日も海のまくなかりて鳴雀　晩籟

越中

江戸のさくら大鰍たらしまし　乾夫
なりもたけれ安れうりたれ杜若　處白
母人にやうねるる雲鳥の乳　白年
淵池の鯉をうねりなきす　関蘿

蔵入れ煙になかぬなのみこの乳　虚白
青嵐こゝ花まれこりの奥歯を　素撲

越後

くすおれて鶯鳴ぬそこのきたれる　石海
海老賣の計里こゝ有すやつの雲　史千
如月や人にも くまる赤者　篪永
鶯にの筆とりてるんん手六十　竹里
更科の月や学本にのてたらん　年眉

佐渡

赤のうしの吹本こまとかり不破の関　文雄

国立国会図書館　タイトル『俳諧西歌仙』 請求記号 863-119
ガラス使用

このあるは鼾のくまて深みたり　淇行

丹波

さみたれの中にもみゆき行の裔　白路

主のいへもはや秋の日も木槿ちる　滄洲

丹後

親と子は中に日永き老の姫　蕪良

もるの雪を降るものとなりたり　万籟

但馬

あらい鞋の目にいまし露れきりしす　菊葦

この出になるらはや花のよし聖山　尚古

因幡

移りて見ゆるにしたり春の夕　李謙

清月つきし人のさそひて帰る　雷師

伯耆

むし鳴やからさもあてある草帚　豊明

琴弾て人れにけるやとしの筈　沾雪

出雲

陽光に流て出しこれ菓汁に　冬曠

蓮生に蚤を入たり雲の峯　花叔

石見

鶴れ出てまで砂ぬるなの法さうれ　古径

詠ふてきて待たれ夜めぬ夜となりにけり　露月

播磨

庭てゐるや木の葉れ異なて夫おして　木海

透通る波れ廣さやこまと尾花　田實

美作

正月を奇麗るさふさう郷　亀年

夷の好れものにはしまぬ情の　月磨

備前

志ら梅のたるや余寒の星明かり　素江

備中

義出れ巣を法み鉢す葉れ木の　閑齋

備後

志をり戸のなかりあるまで花さかるまで　喜林

安藝

咲了てまで夕良の名もちかのまとそわ　玄蛙

花ぬて庭をな古れ白さらし　竹葉

周防

萬竹に行を汲よくなりにけり　一葉

こ濤の暑い中にうらむしの葬　馬来

出を焚て暑さしつむるひとわらず　青海

淡路

暮れ鳴るなり　松れ下しつく　烏秋

くるの夜のまを見るふも霧をわり　青城

阿波

矢ならす鳴やまゝれ淡路島　葦伯

あたらしきてをそ鳴かねと時なる　土芳

讃岐

梅咲て皆戸の通ひや炭俵　南之

しつのされあまわて花のちれ日ゝ　梅堂

伊豫

青竹て巨燵を出たり福沸　石鼎

海山を動して居る国府の礼　呉天

土佐

灌仏やそしも一ぶん咲そめて　灞江

唐さ紀の松より二日そそせ紙ゝ　松青

筑前

澂芽せふ扇うしなふ清水ゝ　五朗

交葉や薮蚊ふせきれ絹をらん　康哉

筑後

国立国会図書館　タイトル『俳諧西歌仙』　請求記号 863-119
ガラス使用

畠にも花れちるなり　京を名　文角

豊前

春れけり奥山里や　猿田彦　北溟

さみられや佐賀のうち家れ流れと　木父

峯の居る蔵来るうちや　請ふくろ　石亭

豊後

山伝の宿を雑木の花れ　月化

垣は　咲にあるこのひに　新くく　有篁

肥前

枯尾花の分を折まるこの手柄にや　菊也

炉冥て　一日ゑきく　楢の那　祥禾

星れ庵を主の待息にかかしかや　鞍風

肥後

東京の祿ふの持ひ　呼雲の礼　岫丸

猿曳の猿とかはちす　柳可南　一巣

日向

なにを去らは少松に安て　入学の陳　真彦

薩摩

青梅にたるをなしうる　柳の那　青梁

高陽に誘ひ出しかや　月　琴洲

国立国会図書館　タイトル『俳諧西歌仙』　請求記号 863-119
ガラス使用

壹岐

川風れすよひこころや松れゆき　三千雄

對馬

新たゝぬ新のやすさや后れ月　戲蝶

去年孔冬やの物見塚に旅寐をし

伝説の一葉のためぎれ夜話といふ

考ひよ語ひよつ神色法立あふ　一茶

ちましもみちぬされのそりに　一瓢

大学鞋小学鞋足にくら屋見て　丶

一番ふねにはゝめるふち祿こ　茶

あくて火もそまた名月を名月そ　丶

芋喰ふ日ならん法代を長員の　瓢

彼岸經さらしさを皆ぬ事て　丶

学れ廣葉に法しむ聖つち　茶

あさの和の程万く日とていうしや　瓢

子をのりて来るくさいく藪入　茶

蜀をしを仍光をゆる黄檗な　瓢

ちらまはらまとうまる山れ圖　茶

泰平と天下の菓の咲ちて　瓢

三百店を　わの月夜かれ　茶

うそ寒の腰の事は其視くらん　飄
まちや御成をふまゆる小鼓　菜
花の鉢こゝはまゝのうまし隅田川　飄
處て来るもまいの其角の　菜

下略

熱白れ丸いそそさて寒いやら一飄
二軒もやいに咲る山菜花一菜
こんな層こゝろ事とまりに川堀て　、
はくわ野ひの酒五百石　飄
隆速のはに万のきし杖の月　、

おとり法度れ辻荒立札　菜
みよし野れ吉野の里へ鉢のうまに　、
子おろし茅を目にまきらて　飄
僧まのくる里桃や流すらん　菜
う月八日を刺こゝろ　日を　飄
そ植ゝ松にちゝあしおとさす　菜
膳所の生洲に名祝ひをいさ　飄
ちゝあちゝの云手拭に穴あけて　菜
ゆのれも見るや妹のよこ敷　飄
うす霧うのまゝ茶れ宵明に　菜

国立国会図書館　タイトル『俳諧西歌仙』　請求記号 863-119
ガラス使用

花のたもとれよしや焦て色　瓢
もしあるより足利流に住なして　茶
曽呂利といつえめてこうらるゝ　瓢

石略

草庵四時

やまたのむ門もの〻くら柳うれ　一瓢
蟻も出てもてなし振やうす雲　、
むしの来る志目ともなれや碧れ学　、
胡麻三粒をねても嫌し雲の朝　、

待宵辭　橘中居

そまた待宵といふを何まれ時にかゝる事のうたわ
ふや呼そめそむ加の侍従の名に傳へるまきて
思雅のうへにまたまたふんれをちちるやと思らきの
なるをうてれより後のふをやふるまて老たる
色茶をもそのさかしもてはやさけるもれやを
あるさるにても或を棋園絵もれにそのほみたる
此ゝ着さくせてそのまひ足の路ところも覚来
そのく宵まとひうちをのるを公れ大事ちくたくれ
いまんまいかゝや何くん或を故女雅君にあゆけ

国立国会図書館　タイトル『俳諧西歌仙』　請求記号 863-119　　ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『俳諧西歌仙』　請求記号 863-119
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『俳諧西歌仙』　請求記号 863-119
ガラス使用

待といふ字れ訓を看破して此幻のおもむき
を味ふ西上人を前擔人に付ちはゞ儀れ
箴ものも何をこの名れ遠んやあらしむのつゆ
永岡れそのわも勇のうぐにおもひとらはそ雪
う賊ものをこゝに碍重しもなわ

有鑄いふこれ一章を眼下の京兵にめて給ひて
師の今自たゞいの力れとしたるを物見塚眺望の
涅槃ものもなまりしと再案の狂歌もまゝこれ
きらふ乞てこゝに載るものゝ

あこのうちにさまにて眼をもさきたてみまとれ
閉ぬ事眼れ中に物れちらしと見ゆる
そを空華といぬたゞれよしなへて此中の
あれはのりきてる此きんれに大ふにあ
面しをこの也一瓢上人の西歌仙をこ此園
よわ西の才れ法ゆ士に各一句を書しめて
このきむ一巻をたゞれ里あれまとにみゆふ
各莖れ詠を西上人の詠るをしたれ

80
863
119
14203

人をきのふまもて手筆も有さるものの
あらし　そこを机上に於しひらく時を
この此空華にゆきしく人しの心採
形貌まゝ地に眼中に入ま身の人こゝに
入まゝらんといへ　そこを机上にあまれ此なを
ゆるゆるまゝ楽しからんや

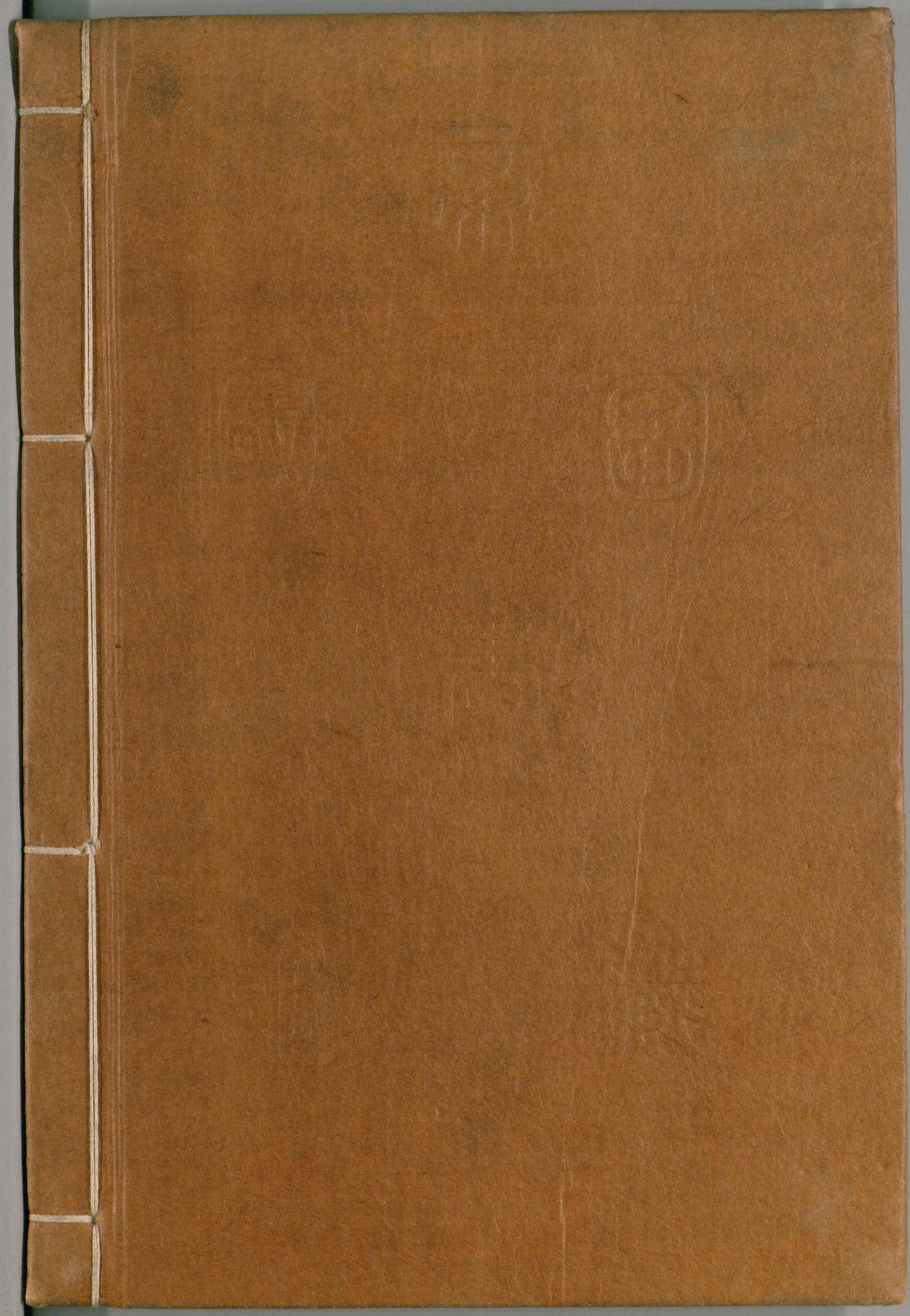
随齋成美跋

国立国会図書館　タイトル『俳諧西歌仙』　請求記号 863-119
ガラス使用

863
119

国立国会図書館　タイトル『俳諧西歌仙』 請求記号 863-119

ガラス使用



国立国会図書館　タイトル『俳諧西歌仙』 請求記号 863-119

ガラス使用